
君となら歩いていける

名前無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君となら歩いていける

【Nコード】

N8787R

【作者名】

名前無し

【あらすじ】

昔から頼れる兄に助けてもらい、優しい兄に依存してすごしてきた。

自分一人で歩んできたこと等なく、いつも助けてもらってばかり。そんな兄が高校に入る前に事故に合い、頼れる人が急にいなくなつた僕は自分一人で人生を歩んでいける気がせず、ただ目標もなく情性で日々をすごしていたが…

始まり

なんでだろう、こんなにも一人でいることが寂しいと感じるなんて。

昔から何をするのにも兄がいてくれた。

小さいときは兄の後ろについてまわり、世話を焼いてもらってきた。

自転車の練習に付き合ってもらったり、逆上がりのコツを教えてもらったり。

兄だって友達がいるだろうに、いつも自分にかまってくれる。

なんで僕に構うの？と聞くと決まって、

『兄ちゃんはな、弟が欲しかったんだ。そして弟に尊敬され、慕われる立派な兄ちゃんになりたいんだ。』

お前が好きだからお前に尊敬されたい、兄ちゃんは我が儘なんだよ。

とかえってくる。

僕はそんな兄が大好きだった。

自分のことを大切にしてくれるのが、僕はすごく嬉しかったのだ。

僕が中学生になるとときには兄は高校生になっていて、部活や勉強で忙しいはずなのに僕の勉強等の面倒をみてくれた。

兄は文武両道で、まわりの皆からも慕われていて、とても良く出来た人だったのだ。

そんな兄に普通は嫉妬の一つでもするのかもしれないけど、僕を含めて誰も兄を妬んだりしなかった。

それだけ人柄がよかったのだ。

僕はそんな兄に面倒を見てもらい、今まで頼りきってきたといつても過言ではない。

そう、今までは……

……これからは兄に頼ることはできない。

僕が高校生になったからではない……。

兄が忙しくなったからでもない……。

兄は…兄はもう……

……この世にはいない存在になってしまったのだ

始まり（後書き）

携帯小説なんて初めてで、昔から小説を書きたいと思っていた所に存在を知り自分の考えた物語を誰かに読んで欲しいと思ったので、思いきって投稿を始めました。

人に読んで貰うなんて初めてで、自分勝手に一人よがりな文章になると思いますが、それでも誰かに見て貰いたくてまずは携帯小説からと始めました。

上手く伝えられないと思いますし、投稿も間が空いたりすると思いますが、これからよろしく願います。

一人じゃられない

「兄さん…全然笑えないよ…こんなの…」

夕暮れの静かな墓地に一人、少年は佇んでいる。

「僕はさ…兄さんに頼ってきたんだ……。今更一人で歩いていけだなんて、そんなのいきなり無茶をゆわないでよ…」

答える声はない、それでも一人、話続ける。

「ほら、こんなにも僕は危なっかしいよ？まだ兄さんの力を借りないと何もできない駄目な奴なんだ……」

もう何度ここに足を運んだだろう…何度同じ問い掛けをしてきただろう…

返事はない。ただ空しく風が吹き抜けるだけで、何も変化はない。

「僕は…」

自分でもわかっていて、失った者は二度と戻らない。

「なんで兄さんは僕を一人にしたのさ…兄さんのほうが必要とされているのに…」

兄は死んだ。

車にひかれそうになった人を庇い、交通事故で亡くなったのだ。

「助かったら武勇伝なのに、自分が死んだらただの馬鹿じゃないか……」

目の前で兄が車にひかれるのを見て、僕は時間が止まった。庇った人や車の運転手、騒ぐまわりの人々が視界から消え、ただ道に転がっている兄だけがはっきりと記憶に残っている……。

その日は高校生になったお祝いにと、兄が買い物に連れていってくれた。

沢山の荷物を持ち、心楽しく家路についていたときだ。

「危ない……!」

と叫び、兄が荷物を投げ捨て道に飛びだした。

気づいたら兄は転がっていて、兄が庇った人が呆然としていた。

車の運転手が慌てて降りてきて、まわりの人々が救急車を呼んだり、倒れている兄に駆け寄り寄りたりするなか、僕は意識が真っ白だった。

……そしていつの間にか、兄の墓の前で泣き伏す両親と一緒にいた。

それまでのことは覚えていなく、ただ、兄はもうこの世にいないという現実だけが重く心にのしかかってくる。

「じゃあ、そろそろ帰るよ…兄さん、またね」

兄が死んだ後、僕は高校に入り無論友達も作ったが、学校帰りにはずっと兄の墓参りに来ている。

幸い、まわりの友人も察してくれて文句は言わず、ただ優しく見守ってくれている。

兄がいない日々は僕にとって寂しく、また、頼れる人がいなくなった不安感に駆られ、自分一人で歩んで行ける自信が持てず、ただ惰性で日々を過ごしていく。

事故当時の記憶はあまりなく、心にはただ大事な人を失った寂しさがあるだけ……いや、大事な人を失ったことよりも心を押し潰す思いがある。

兄の墓に別れを告げた後、僕は帰路につく。

「春なのに、少し冷え込むな…早く帰って暖かくするか…うわっ…！」

一際強い風が吹き抜け、一瞬目を閉じる。

「風、強いな…」

目を開け視界が戻ってくると、またまわりの様子がわかりはじめる。

「……………あっ」

視界が戻り帰路を見るとそこには一人の少女がいた。

とても綺麗な長髪で、お供え用なのか手に花を抱えて片手で風になびく髪を押さえている。

思わず足を止めて、少女に見とれる。

「あつ、あの！」

顔立ちも綺麗で、その姿に僕はとても心を惹かれ、思わず声をかけてしまっていた。

「……えっ？」

突然声をかけられ、少女は驚く。

少女に驚かれ、そこで初めて僕は我に帰った。

「あつ、いや、なんでもないです…さようなら」

自分から知らない人、しかも女の子に話かけたのは初めてで、恥ずかしくなりすぐにその場から立ち去ろうとする。

「あつ、ちよつと…」

少女は僕を呼び止めようとしたが、

「すみません！なんでもないです！では！」

僕は突然見知らぬ少女に声をかけたことに気恥ずかしくなり、その場から急いで立ち去る。

「あの人は……………」

少年が去った後、少女は自分の手の中にあるものを見つめていたが、

「……………きっと、大丈夫かな？」

なにかを思うように頷き、少年が去った方向をもう一度みたあと歩きたした。

そのまま少女は少年が去った反対方向、墓地へと向かった。

久しぶりの朝食

その日の目覚めはとてもすがすがしく、珍しく早くから目が覚めた。

「すげ…朝食食うのなんていつ以来だろう…」
食卓で納豆を混ぜながらそんなことを呟く。

小鳥遊家の朝食はパンではなくご飯、そのようなことも忘れていたくらいに久しぶりの朝食。

兄がいなくなってからというものの僕を朝早くから起こしてくれる人はいなく、自堕落な生活を送り続けてきた。

両親は僕を起こすのが面倒らしく、学校に遅刻しそうでも余裕で放置される。

「目覚ましより早く起きるだなんて…どうしたんだろ？」
味噌汁を啜りながらもいまだに朝早くから目が覚めたことに驚いている…

父さんは朝が早いので、
僕が起きた時にはすでに玄関先で母さんに見送られているところだった。

「…えっ！嘘！直哉が起きてる！？」

見送りから帰ってきて僕の姿を見た母さんはものすごく驚き、

「直弘さん！傘！傘！」

と叫びながら、家を出た父さんを慌てて追いかける。

そんな母さんの様子をみて直哉は、

『僕だって前はちゃんと朝早くから起きてたよ…最近は違うけどさ

……

というか僕が早く起きたからって雨は降らないだろ……』

と心の中で思いながら、顔を洗いに洗面所に向かった。

そして顔を洗い終えた後、戻ってきた母さんと食卓につき今にいたる。

「それにしても珍しいわね…」

母さんは直哉がいつもより大分早く起きてきたことに、まだ驚いている。

「僕だって、早く目が覚めることもあるさ。」

漬物をポリポリとかじりながら返す。

「昨日は珍しく早く寝ていたけど、なにかあったの？」

母さんは味噌汁を啜りながら昨日の直哉の様子について、聞いてきた。

「特になにもなかったよ、いつも通り。ベッドに入って考え事をしていたら気づいたら寝てた。」

昨日は帰ってから意外と早く寝た。あくまでも意外と。

「考え事してそのまま寝るなんて……直哉にしては珍しいわね？」
母さんはそんな直哉の答えに、不思議そうに首を傾げる。

「うーん……なにを考えてたか思い出せないけどね……」
少し悩んで思い出せなかったので、苦笑しながらそう返した。

「でもその様子なら、
なにか良いことで悩んでいたのね。」

母さんは微笑んだ。

「……そんなに僕は嬉しそうに見えるの？」
自分はそんなに機嫌がいいのかと、不思議に思う。

「顔に出てると思うよりも、もはや態度がいつもより上機嫌ね……
彼女でもできたの？」

嬉しそうに母さんは笑う。

思わず飲んでいたお茶を吹き出しそうになりつつ、慌てて否定する。

「ないない！！別に昨日はなにもなかったよ。いつも通り兄さんに会いに行っただけ。」

兄さんの話題を出すと一瞬、母さんの表情が曇った。

「……そう、でもあまり辛いことばかり思いだしてはだめよ？」

母さんは気遣うようにこちらをみる。

「大丈夫だよ… にも辛いことなんてないさ、ただのお墓参り。」
そんな母さんの気遣いに、僕は何気ないようにかえす。

それでも母さんは箸を動かす手を止め、僕の目を見て話を続けた。

「だって…… 直人がいなくなってから直哉、ずっと辛そうにすごしているじゃない……」

話ながら最初、母さんの表情に複雑な感情が見えたが、すぐにこちらを心配している様子になる。

「…… 兄さんがいなくなっただ、それこそ元氣にいるほうが不自然だよ。」

何も問題がないよと、笑いながら返す。

問題ないと思いながらも内心、少し心が揺らいだ……。

「… 悲しいのはわかるけど……、忘れるとは言わないけど…… 直哉には直哉の生活があるのよ？」

母さんはしっかりとこちらを見て諭すように話かけてくる。

「母さんにとつてはあなたも大事な息子なの、いつまでも過去に囚われずに明るく過ごして……」

「……大丈夫だよ、別に僕はもう引きずってなんかいない。心配しなくても元気だよ……ほら、折角僕が早く起きたのに重い話をするなんて母さんに悪いよ、元気だから気にしないで」

重い空気を払うように、強引に話を終らせる。

そして、残ったご飯を一気に掻き込んで「ご馳走様」と言って席を立った。

「じゃあ行ってきます。」

朝食を終え、学校の支度をして家を出る。

「気をつけてね。折角の高校生活よ沢山楽しんできなさい、彼女も作るのよ？フッフ」

悪戯っ子みたいな笑顔で母さんはからかう。

そんな母さんに苦笑しつつ手を振り、

「余計なお世話、じゃあ行ってきます！」
家を後にする。

そして清々しい朝の道を僕は学校に向かった。

元気そうに走りさる息子を見送りながら、母は呟く。

「辛いなら……そんな泣きそうな顔なんてしないでしょ……」

誰に話かけるでもなく静かに呟き、息子が見えなくなるまで見送る。

「さてと！掃除に洗濯！やることがいっぱいだわ」

そして息子が見えなくなると、鼻歌を歌いながらそそくさと家に戻っていった。

朝から五月蠅い奴

早朝の町を余裕を持って通学するのはいつ以来だろう。正直、高校生になってから初めてかもしれない…。

「意外と寒いな…」

まだ夏になる前だからか、朝の空気は清々しいが少し…寒い。

「さつさと学校に行って二度寝でもするか。」

そう決めると、早足で学校に向かった。

一年生の教室は校舎の三階にある。とりあえず無駄に長い階段をぐだぐだと文句を言いながら上り、教室に入る。

「誰もいない…」

正直自分より早く来ている奴が誰かいるかなと期待していたが、誰も来ていなかった。

「…寝るか」

誰もいないというのは意外と寂しいもので、少しふて腐れる。しかしそんな気持ちも一瞬で、すぐに元の思考に切り替えて机に突っ伏した。

「……ひんやりしてる…気持ちいい……」

意識はすぐに遠のく。

やはりなんだかんだで朝が早いと多少の睡魔が残る。なのですぐに気持ちよくなり、ホームルームまで寝ようと決める。

『机で寝るのすげーなんかいい…』

固いの気持ちよく感じる不思議な感覚を味わいながら寝息を立てはじめる…ぐう。

机に突っ伏すしてから数分、教室のドアが乱暴に開けられた。そして乱暴に開けた張本人は教室にはいると一声、

「おつはよー！！今日も俺は教室に一番乗りだぜー！！……つて、直哉がこんな時間から来てるー！？なんでー！？」

と挨拶から驚くまでの動作をかなりのオーバーアクションでおこなった。

『朝から五月蠅いのがきやがった…。あいつ、こんな時間から登校してたのか……無視しよ。』

顔も上げず声だけで判断すると、すぐに睡眠を続ける。眠い。

一方、自分が驚いているのに反応のない友人をみた彼は大袈裟にショックをうけ、友人に駆け寄り、

「なんだよー、早く来てるなら挨拶くらいしろよー？俺が可哀相な奴になっちゃうだろー」

自分を無視して睡眠を続ける友人を揺する。

「……………」

「起きろー！」
体を揺する、ゆさゆさ

「……………」
「なーおーやー！」
机を揺らす、がたがた

「……………」
「これならどうだ!!」
髪をひとふさひき抜かれる。ぶちっ。

「いてえな!!ぶん殴るぞこら!!」
我慢ができなくなり、顔を上げキレる。

「おー、起きた起きた」

対する彼は友人が怒っているのを無視。ニコニコと笑い、
「朝から学校来て寝るなんて、つまんねー奴だな」
と顔を突いてくる。

「ほっとけ…第一、お前に面白い奴と思われたって俺にはなんの得もねーから…」

折角いい感じに気持ちよくなってたのに…と恨みがましく睨みつけてみたが、

「なんでこんな朝早くから直哉来てんの?いつも遅刻ギリギリのくせに」

睨まれているのを普通にスルー、こちらに質問してきた。

こいつ…!!

「たまたま早く起きたから学校に來ただけ、家にいてもやることないし。」

呆れつつも、彼の質問に答える。

「なら、なんで学校で二度寝してんだよー？家で寝たってかわんなくね？」

「家で寝たら遅刻するかしんないだろ？」

不思議そうな顔をする彼にそう返す。

「でも普段のお前なら家で二度寝して、遅刻ギリギリでくるのに…今日はなんで遅刻気にすんの？」

直哉らしくねーぞ、と彼は聞いてきた。

「……………今日はそういう気分だったんだよ、気にするな。」

自分でも確かにと思いつつ、言葉で認めると負けな気がしたので適当に返しておく。

「そっか、気分か、ならいいか。」

そう言つと彼は自分の席に着き、荷物を整理し始めた。

朝からうつとうしいくらいに元気な彼は、一応高校生になる前からの友人で名前は佐伯雄介^{さへきゆうすけ}。

とりあえず元気………けどどこか抜けている、そんなよくいるア

ホな奴。勉強はできるけど…。

朝から元気なのはうつつとしいことこのうえないが、別に悪い奴ではない。

むしろ他人に氣遣うべきところではちゃんと氣遣う、良くも悪くもさっぱりとした氣持ちのいい性格をしている。

周りからもその性格と微妙に天然なおかげで、男女問わず慕われている数少ない僕の友人だ。

なんで仲良くなったかは僕は覚えていない、氣がついたら友達同士になっていた。

まあ、そんな感じで一緒に話すようになった。

荷物を整理し終わったのか、雄介はニコニコしながらこちらへ戻ってくる。

「直哉、トランプしよーぜー？」

楽しそうな彼のその手には、トランプが握られていた。

「眠らせてくれないのね…はぁ…」

ため息をつきつつ体を起こし、仕方ないなと雄介の相手を始める。

「なにする？」

「何でもいいよ。」

それからはホームルームが始まるまで、雄介と後から来たクラスメイト達と雑談しながらトランプをした。

日常の変化

「ふう…とりあえず午前の授業は終わりだな。」

おおきく伸びをし、首をほぐして席を立つ。

今は昼休み、皆思い思いに昼食の準備をしている。

食堂に猛ダッシュで駆けていく奴、自前の弁当やコンビニ飯を机に広げる奴、屋上や中庭に移動する奴。そしてカップルでベタベタしながら弁当の内容について話、教室を出ていく奴…消える。

「ほんと、マジ恋人達なんて消えちまえばいいのにな！直哉、飯食おーぜ」

「まったくその通りだ…って、人の思考を読むな！」

横に突然雄介が現れたので驚きつつも、ツツコミは忘れない。

「俺、今日はパン。直哉はー？」

「……パン」

そんな直哉のツツコミを華麗に無視する雄介に呆れつつ、さらにつつこむのは諦め飯の準備をする。

「今日は屋上にでもいつて食べない？」

唐突な雄介の提案に、

「珍しいな？お前が外で食べるなんていいだすとは」

僕は驚く。

「いやー、直哉が珍しく朝早くから学校に来てたから俺も珍しいことでしょうか。中庭は嫌だけど……」

「確かに……」

雄介が中庭を嫌がる理由はただ一つ、カップルがやたら多い。ただその一点につきる。

「わかったよ、俺はどこでもいいから早く食いたい。」

「なら屋上まで走るか！腹も減らせて一石二鳥だぜー！」

「やだよ、すでに減ってるし。廊下は走るな、だろ」

そんなやり取りをしながら屋上に向かう。

『今日は暖かそうだな』

と廊下の窓から外を見ながら雄介と他愛もない話を続けた。

「なんだよー、遅刻魔の癖に規律に厳しいのかよ？」

「遅刻ギリギリなだけで遅刻は『魔』が付くほどしてない……」

「でも、遅刻は遅刻だろ？」

階段を上りつつ、雄介の文句を適当にあしらう。

しかし、若干形勢が怪しくなってきた……

「だいたいさー直哉は……」

「静かにしろよ、もうすぐ職員室だぜ？」

雄介は以外に頭は回るほうなので（行動は抜けてるが……）負けそうになったため、話を逸らす。

「……卑怯者。」

雄介は口を尖らす。

でもまあ、職員室が近いのは事実。屋上に行くまでの道のりは職員室の前を通らなければならぬのだ。

「……………よしっ。」

これで事実上は俺の勝ち…なはず。逃げた訳じゃないぞ？断じて

対する雄介はさくっと思考を切り替え、

「パン〜パン〜」

変な歌を歌ってる……………何と言うか……………ごめん、俺の負けだわ。

すこし落ち込みながら視線を無意識にさまよわすと、視界に気になる人影が写った。

雄介も気がついたらしく、

「おっ、かわいい女の子がいる。」

すこし興奮ぎみに声を上げた。

雄介の言うとおり、確かにかわいい女の子が…あれ？あの子、どこかでみたような…？

「あれ？……………もしかしてあの子、昨日の…」

「あら？直哉の知り合いなの？いいな〜…あつ、職員室に入ってた。」

雄介のゆうとおり、その少女は職員室におずおずとした様子で入っていた。

「可愛かったな〜…いや、どちらかと言えば美人系かな？」

「……………」

「…直哉？」

「……………おっ？すまんすまん。」

雄介に呼ばれるまで見とれてしまった、危なく本来の目的を忘れるところだった…

「じゃあ、さつさと屋上に飯を食いに行くか。」

雄介に声をかけ、屋上に急ぐ。

「……………なる、こりやいや」

雄介のなにかを企んでいい案が閃いた！という表情に僕は気がつかなかった。

屋上にて

屋上へのドアを開くと風が一気になだれ込み、暴れる髪を片手で押さえる。

そして、適当な場所を探して腰を下ろした。

残念なことに日陰になっている所しか場所がなく、日向は別のグループが陣取っていた。

「ふあやくふへほ、はほは」

「もう食いはじめてんのかよ……とりあえず口に物を入れたまましやべるな、行儀も悪いし聞き取れない」

「んぐ…ごめんごめん、まああんまり固いこといってないで直哉も早く食えよ」

「言われなくても食べるさ、しかし相変わらずお前のパンの量すごいな」

早くもがつつく雄介の袋には大量のパンが詰まっていた。

「一個いる？」

「……いない」

口に焼きそばパンをくわえながらパンを差し出してくる雄介に断りをいれ、自分のパンを出す。

メロンパン、あと飲み物にイチゴ牛乳。とりあえず僕はこれで腹いっぱいになる。

「直哉は相変わらず少ないな、というか甘っ!」

コロツケパンの袋を開けながら、雄介はこちらを見てつつこむ。

いいんだよ…別に僕は甘党だから。すこしむっとしつつ食事を始める。

雄介は夢中で食事を再開したので、少しの間会話がなくなつた。

「ふい…食べた食べた。」

雄介は満足そうにお腹をさする。

「……………早」

まだこちらはメロンパンを半分しか消費していない。雄介は食べるのが早すぎる…………いや、僕も大概遅いのだが。

「しかしさっきの女の子、綺麗だったよな」

唐突に雄介はコーヒー牛乳を飲みながら話始めた。

「……………うん」

特に反論するようなことでもなく、自分もそう思ったので素直に頷く。

「直哉、さっきなんか考えてたけど……あの子知り合い？」
興味有りといった様子で雄介は聞いてきた。

そんな友人のわかりやすい態度に苦笑しつつ、思いついたことを話す。

「昨日、兄さんの墓参りに行った帰りに見かけた女の子だと思う」

おそらくそうだろうと思いながら伝える。

「……？あんまり人のことを覚えない雄介が、見かけただけで覚えるなんて珍しいな？」

「……確かに」

雄介の言う通り、僕は他人を覚えない。一、三回話しただけでは顔も覚えない。

今日は『珍しいな』、『……確かに』がワンセットになっているな
と思いつつ、

「ほら、綺麗な女の子だったからさ？」
と、適当にお茶を濁す。

言われてから考えたら心当たりがあつたのだが、正直なところこの話は恥ずかしい。

「アイドルの可愛い女の子もろくに興味を示さない、おかげでホモ疑惑の上がった直哉が？」

雄介は訝しむような顔をして聞いてくる。

「俺はホモじゃない…」

「知ってるよ、直哉がホモじゃない健全な一高校生だというくらい。」

とりあえず話を逸らそうとホモ疑惑に抗議を試みるが、すぐに話を戻される。

そして、雄介は何かを理解したといった顔で聞いてくる。

「…なんかあったな？」

「………何もない」

ニヤニヤと雄介は笑う。

「間が怪しい、なんかあっただろ」

「…何もない」

適当に誤魔化す。

「………」

「………」

しばしの沈黙。

そして雄介は確信を持ったという顔で口を開いた。

「……あまりにも可愛かったから、自分から声をかけたとか？」

「……っ!？」

あまりにも的確に当ててきたため、かなり動揺する。

雄介はフムフムと頷き、楽しそうに笑うと、

「成る程、それはそれは直哉にしては積極的な…まあ詳しく話せよ」と

「……誰にも言うなよ」

ニヤニヤしながら楽しそうな様子の雄介に、渋々昨日の出来事を話す。

昨日兄の墓参りの後に彼女に出会ったこと。

そして自分でも驚いくことに、彼女に反射的に声をかけたこと。そして自分の行動に恥ずかしくなり、適当に誤魔化してその場を立ち去ったこと。

一通り話すと雄介は「ほほう…」と頷き、心底嬉しそうにする。

そして、

「ついに、直哉にも春が来たか……」

うんうん、お父さんは嬉しいぞ」

と勝手に涙ぐみ、空を仰ぐ。

「誰がお父さんだ誰が、お前を父親にした覚えはない。」

一人で感慨に浸る雄介にとりあえずつつこみをいれておく。

対する雄介はそれを無視、なにか納得したような顔をして、

「……………なるほど、

だからさつきからそわそわしてるのか。」

ぼそつと何かを呟く。

「何かいったか？」

「いや、何も。」

雄介はどうしたのだろうか？普段ははっきりと言葉で伝えてくるのに、今は何故か一人で考えながらぼそぼそ呟いている。

普段が普段なだけに雄介の様子を怪しく思うもあまり深く考えず、気にしないことにする。こいつの考えることはわからん。

仕方ないので、一人で考えこんでいる雄介を放置して、空を眺める。

気持ちいい…。

ふと雄介は思い立ったように転がると、

「あー、すげえ気持ちいいから寝よう！」

と言い出した。

「いきなりどうした？」

突然声を大にしてそう言い出し、寝転がる友人に少し驚きつつも、言葉通りの意味だろうと適当に返す。

雄介はこちらに転がったままひらひらと手を振ると、

「俺今から昼休み終わるまで寝るから、直哉はどっかにいつときなよー。」

と言い出した。

「勝手だな。」

苦笑しつつ、事実話し相手はいないので屋上からでてうつくことにする。

「じゃあな、またあとで。」

「お休みー。」

寝息を立てはじめる雄介を後ろに、屋上を出ることにした。

「さて、どうするか…」

いざうろついてみるとどこも行く当てがない。

大人しく教室にでも帰るか…とも思ったのだが、ふと脳裏にあの少女のことが浮かぶ。

「あの子、転校生だろうか？」

少なくとも、この学校の生徒にはあんな目立つような女の子はいなかったような……と自分の役に立たない記憶を掘り返す。

うん、いない。

「ちょっと気になるな…」

そう思うと自然に足取りは職員室に向かっていた。

屋上には一人、空を仰ぎながら雄介が寝転がっていた。

「まったく……やっとまわりに興味を持ち出してくれたか。」

苦笑しつつ、雄介は思い出す。

『あいつ、お兄さんが死んでからいろんなことに興味を持たなくなつたからな……』

直哉の兄が亡くなってから、直哉はあからさまに元気を失った。

最近では大分話せるようになったが、前は自分にすら会話をしてくれなかった。

『でもあいつ、元気になってきているというよりは……』

直哉の様子は雄介も含めて、周りからかなりの無理をしているように見えた。

周りに心配をかけないように……そうやって心を閉ざしているように見えるのだ。

少なくとも親友である自分にはそう見える。

『まったく……もっと自分らしく生きろよな。』

直哉は兄に頼って来たため、自分一人で生きていく自信を持っていない。

自分にはなにも出来ないとい心の底から思っているため、積極的になにかに取り組まず、関わろうとしない。

そんな直哉が自分から人に話しかけたのだ。

『しかも、スゲー綺麗な女の子。こりゃ直哉には頑張って貰わない

と。』

少しずつでも直哉には立ち直ってもらい、自分に自信を持って貰いたい……そう雄介は思っている。

雄介が辛い時に支えてくれたのは、他でもない直哉なのだから。

『兄さんに助けて貰ってるから僕は大丈夫、だから雄介の辛いことくらい一緒に背負ってやるよ！雄介は僕の友達だろ！』

幼い頃の直哉の言葉を思い出す。

あの時、自分は確かに一人の直哉という少年に救われたのだ。

『辛い時に支えてくれたんだ……お前が辛いなら一緒に背負い込んで、お前のことを支えてやるよ』

そんなことを心に思うと、雄介はなんだか気恥ずかしくなる。

そんなことを心に思うと、雄介はなんだか気恥ずかしくなる。

「やべえ……なんかめっちゃ今の俺くせえ……！……うっわ恥ずかしい……！」

周りから変な目で見られてることもお構いなしに、彼は一人悶えた。

少女は誰？

「はあ…何処にいるんだろう」

溜息をつきつつ、フラフラと探す。

あのあと職員室に向かったのだが、既に彼女は職員室を後にしていた。

職員室には幸い一番取っ付きやすい担任の平井がいてくれて、話を聞くことには聞けた……

のだが……どうも質問していくに連れ自分でも気付かぬ内に興奮してたみたいで担任の平井に、

「ま、まあ落ち着け小鳥遊……！とりあえず……な？」
かなり驚かれてしまった。

なだめられてから我に帰り、何故興奮したのか分からなくてとりあえず落ち着く。

同時に担任の教師に詰め寄り、必死に彼女について聞いた自分が恥ずかしくなり赤面した。

平井先生は「ふう」と一息つくと、

「どうしたんだ小鳥遊、普段大人しいお前からは想像できないくらいの勢いだったから先生、びっくりしたぞ？」
と聞いてきた。

「いや…別に意味はなくて、その…ただ気になったというか……」
自分でも今一つ理解が出来なくて返答に困る。

そんな直哉の様子を見て平井先生は何かを感じいたような顔をし、
「小鳥遊にだけ先に教えといてやろう、彼女は転校生で明日からこの学校に来るんだよ」
と嬉々として教えてくれた。

「……転校生……クラスは!？」

転校生と聞いて、まずは彼女のクラスが気になる。
なぜかは分からなかったが、自分と同じ年だという確信はあった。

「うちのクラスだよ。まあまあ、落ち着きなさい。」

鼻息荒く質問する直哉をなだめつつ、先生は答える。

「そうか……うちのクラスか……良かった。」

言ってから直哉は自分が安堵していることに戸惑う。

『あれ……なんでいま僕は良かったと思ったのだろうか?』

自分の気持ちに理解ができず首を傾げる直哉の様子を見て苦笑しつつ、先生は彼女は今校内を回って学校に慣れて貰ってるよと教えてくれた。

とりあえず先生にお礼を言っ、職員室を後にしようとする直哉を先生が呼び止める。

「小鳥遊、お前の事情は知っているからあまり深くは言わないが……もっと楽しそうに学園生活を送ってほしいと先生は思う。」
と、複雑そうな顔をしながら声をかける。

今日はやけに皆この話題をだすなと思いつつ、

「大丈夫です、充分楽しんでますよ？顔に出にくいタイプなんです。」

と返した。

「そうか？ならいいんだが……まあ、青春は短いぞ？過去に縛られず、いい思い出をつくるんだな。」

「頑張りますよ。」

先生の言葉に笑いながら返し、直哉は職員室を後にした。

「一時期はどうなるかと思ったけど……大分ましにはなってきたな……しかし……」

直哉が去った後の職員室で平井は一人物思いにふける。

最近になつて小鳥遊は大分明るくなつたが、根本的なところで周りを避けているふしがあった。

『まあ、なににせよこれは本人の問題……いや、本人達の問題だ』

彼らの事情を知っているからこそ、彼らにしか解決ができない。

これには自分が口を挟むべきではない……平井はそう思っていた。

「どちらにせよ、小鳥遊には頑張ってもらいたいな。頑張れよ、青春は短いからな……」

そう呟くと、平井は心底楽しそうに笑みを浮かべた。

そしてその後職員室を後にした直哉は、フラフラと彼女を探して
校内をうろつき、今にいたる。

秘密の場所

とりあえず校内見学だそうなので体育館や食堂、保健室に中庭等を廻ってみたがそれらしき人物はいなかった。

どうしたものかと悩んでみるが、それで見つかる訳でもなく直哉は途方に暮れる。

「今日は諦めるか……」

すこし残念に思いながらも、見つからないものは仕方がない。

「まだ、次の授業まで時間はあるな……何時もの場所で落ち着くか……」

直哉は呟くと、校舎とは別の方向に歩きだした。

直哉の通うこの『私立青柳高等学校』は通称『青高』と呼ばれ、周りを山に囲まれ敷地内には川が流れる少し変わった学校である。また、自然と一体ただけではなく、その広大な敷地も他の学校よりも一線をかくしている理由の一つでもあった。

そんな青高なのだが広大な敷地は管理を少々難しくしており、川なども流れているせいですぐに自然そのものの姿になってしまっている。

そのため管理されている中庭やグラウンドならともかく、敷地の奥、山に近くなるほど鬱蒼とした草木が繁っているのだが、別に学校側としてはたいして問題は無く、生徒が迷うような度合いではな

いので対応としてはたまに業者が整えるぐらいであった。

そして、敷地面積が広いからといって金持ち学校というわけでもなく、来るもの拒まずな校風を学校側は掲げている。（まあ、少し高めの学力は必要なのだが…）

そんなこんなで自然の清々しさと比較的自由な校風、敷地面積の広大さから生徒たちには意外に評判のいいのがうちの青高であった。

そして今から直哉が向かっている場所も、そんな青高の特性のおかげで出来上がった直哉お気に入りの場所だ。

「ふう、着いた。」

普通の生徒はまず立ち寄らない、校内に流れる川沿いから少し奥の開けた場所。

日が射してここいいこの場所が直哉は好きだった。

日常とは掛け離れた、まるで物語にでてくる秘密の場所……といった様子のこの場所は、直哉を現実から一時の間だけ遠ざけてくれる。

直哉は日が射す場所の真ん中にちょうど生えている木によりかかり、物思いにふける…。

考えるのは何時ものようになくなった兄に対しての思い。

兄さんがいなくなったことに対して、周りには辛くないと言っているのは本当。それは紛れも無い事実のはずだった。

しかし、なぜか心がストップをかける…自分一人では何もできないという恐怖が直哉を何時も一歩さがらせる。

兄さんがいなくなつて悲しいという感情は乗りこえている…ただ、兄さんかいなくなつた自分が一人で生きていけるのかが分からずに……怖い。

そう、自転車の練習で後ろの支えてくれている手が突然離される恐怖。

前フリも無く離され、そして離されたことに気付いてしまったためにどうしてもいいかが分からない。

心の準備もできず、かといって気付かずいつのまにか走っている、そんな訳でもない。

そんな状態のまま、いまだに迷っているのだ。

「兄さんが急に手を離すから、僕は前に進めない……」

甘えたことなのは重々承知している、世間では当たり前だということもわかっている。

でも、目的も無く、ただ差し延べられた手を握って連れていってもらふことしか僕はしてこなかった……。

兄さんに甘えてきたのは自分の意思で、樂をして尚且つ兄さんの頼った時の嬉しい顔に、自分が必要とされていると喜んだのも自分だ。

なのに、口から出るのは過保護だった兄への批判……自分が必要な時にいなくなった、言うなれば『我が儘』である。

「惨めだよ…自分で決められない、目標が立てられない……僕はなんのために僕の人生を歩んで来たんだよ……所詮、よく言う他人に敷

かれたレールを走ってきた人生なんだよ……。」

辛いのは兄の死ではない、自分自身の未来への恐怖……。誰もそれに気付いてくれない。

すこしの間でいいから一人で歩めるまで、支えてほしい。悲しいんじゃない、怖いんだ……。それが直哉の思い。

頬を涙が伝う。

「なんだよ……さっきまで元気だったのに……情緒不安定だな僕……あはは……」

誤魔化すように笑ってみても涙は止まらない。

だんだん笑い声も嗚咽に変わりだし、我慢が出来なくなり膝を抱えてみつともなく泣き出す。

「あつ……ううあ……は……うぐっ……」

涙は止まらなく抱えた膝では足りなくなり、救いを求めるように手を伸ばす。

そこに誰もいないとわかっている。

それでも誰かに助けて欲しかったから……。

不意に伸ばした手を誰かが優しく握る。

驚いて前を見ると、涙で歪んだ視界にあの時の少女がいた。

「大丈夫、私が支えてあげるから…。」

少女は優しく微笑みかけてくれ、直哉をそっと抱きしめてくれる。

まだ名前もしらないような少女に抱かれているのに直哉は心が落ち着き、同時に重く抱え込んでいたものが少し軽くなった気がした。

そして少女の腕の中で、直哉は泣き続ける。

そこに込められた感情は先程とは違う、安堵からくる声だった。

優しい心に包まれて

花の香りがする。

とても落ち着く。

なんの花だろう？

何処かで嗅いだことのある香りだ…。

ああ、わかった…。

これはジャスミンの花の香りだ。

この香りを僕は好き。

でもなぜだろう？

普段何気なく嗅いだりする香りとは違う…。

この香りにはなぜだか心がとても安らぐ…。

分からない……分からない……なぜ違うのかが分からない。

いや、なんとなくだがわかっているのかもしれない……。

花の香りだけではない、優しさを感じるから。

温かく見守ってくれる心が感じられる。

自分一人じゃないと思わせてくれる、優しい心が……。

もう少しだけ、僕を包んでいて欲しい。

一人では歩いていけない僕を、見守っていて欲しい。

この香りに包まれたまま、このままでいたい。

自分に決心がつくまでの間でいいから……。

このまま………。

優しい心に包まれて（後書き）

なんでこんな恥ずかしい文章をだせたんだろう？

少し後悔。

痛いなあ自分…。

側にいてほしい

「そろそろ起きないと、夜になるわよ？」

誰かの呼びかけにより直哉は目を覚ます。

ぼやけていた視界が戻るにつれて、自分が今どういう状況なのかを理解する。

今の直哉の状況、夕暮れ時の微妙に肌寒い中で寝転んでいる。

……少女に膝枕をして貰っている状態で。

「えっ、あつ……ご、ごめん!!」

状況を理解すると一気に意識は覚醒して、なにがごめんかは分からないけどとりあえず謝りながら跳び起きる。

対する少女は落ち着いた様子で服の汚れを払いながら立ち上がり、
「そんなに驚かなくても大丈夫よ……特に私のほうには問題はないわ。」

と、なんでもないように言った。

「その、なんで？えと……」 上手く言葉がまとまらず、直哉は困惑する。

そんな直哉を見て少女は溜息を一つつくと、
「貴方はあのあと泣き疲れてそのまま寝てしまったの。その辺に転がしたまま放置なんて出来ないから、仕方なく一緒にいてあげた。」

で、今の今まで貴方はぐっすりと寝ていたのよ。理解した？」

直哉が疑問に思っているであろうことについて、説明してくれた。

少女の説明を受け状況を完全に理解した直哉は、みつともなく泣いている姿を見られ、あまつさえも見ず知らずの少女に膝枕までして貰ったことに赤面する。

それと同時に少女が誰なのかという疑問が直哉の頭に浮ぶ。

「どうしたの？」

自分を見つめる直哉の視線に気付いた少女は不思議そうな顔をする。

「あつあの！君の名前は……！？あとなんでこんなところに……！？なぜ僕といてくれたんだ！？」

一度質問を始めると止まらない。

自分の勢いに驚きながらも直哉は少女に詰め寄った。

知りたい、彼女について。知りたい、先程の言葉の意味を。

少女は確かに言った、『支えてくれる』と…。

矢継ぎ早に質問をしてくる直哉を前に少女は深呼吸を一つ、右手を上げて勢いをつけ…

「……えいつ」

直哉の頭に手刀を振り落とした。

「……って！……え、あれ？」

対する直哉は突然のことに戸惑い、オロオロとしだす。

そんな直哉を少女は見据えて、

「落ち着きなさい！まったく……初めて話す相手、しかも私は女よ？そんな剣幕では答えることもできないわ。」
といい、呆れたように溜息をつく。

「あつ……ごめん……。」

少女に叱咤されて直哉は落ち着きを取り戻し、自分のしたことを反省して素直に謝る。

そんな直哉の様子を見て少女は微笑むと、すっと片手を差し出して、

「私の名前は楠茉莉^{くすのき まつり}。明日からこの学校に通うことになってるの、よろしく。」

と、自分の名前を教えてくれた。

一瞬迷ったが、少女の手を握り直哉も自己紹介をする。

「小鳥遊直哉、この学校に通っています……。その……昨日も僕達、あつたよね？」

昨日のことを思いだしながら、少女に尋ねる。

「それ、ナンパに聞こえるわよ？」

直哉の質問に、少女は口元に手をあててクスクスと笑う。

『あれ？違ったか』と直哉は焦った。

そんな直哉を見て少女は、

「冗談よ。貴方は見てると面白いわね？」

と言い、またクスクスと笑う。

直哉は安堵して、やっぱり昨日の少女なんだと知り、なぜだか分からないうけど嬉しくなった。

「とりあえず、そろそろ手を離してくれないかしら？」

直哉は言われてから自分がまだ手を握っていることに気付いて、急いで離す。

少女の手を離す時に、何故か少し惜しいと直哉は思った。

そんな直哉の気持ちを知ってか知らずしてか少女は、

「目が覚めていきなり目の前の女の子に質問攻めだなんて、随分と手が早いよね……おサボりさん？」

冗談めかしてそう言う。

少女にそう言われてから直哉は自分が午後の授業にでていないことに、いまさらながら気付く。

やってしまったなと直哉は頭を抱えるが、それと同時に赤の他人に手刀をいきなり加えてくる彼女も、違った意味で手が早いと直哉は思った。

「まあ貴方のことだから、別に私には関係ないのだけれどね？」

少女はそう言うのと側の木によりかかり、腰を下ろした。

だんだんと落ち着いてきた直哉は、そんな少女に改めて質問の続きをする。

「なぜ君はこんなところに来たんだ？校内見学ならここまでは来ないだろ？」

そう、この少女は学校に慣れるために校内を見て回っていたはずなのだ。

こんな外れまでくる必要はない。

直哉の質問にうん…と彼女は少し考えると、

「こんなにも自然があるのに、あんな校内にいたって気持ち良いとは思わないでしょ？それに、もう校内は一通り見て回ったしね。」と、笑ってそう答えてくれた。

なるほど一理あると納得して、次の質問へ。

「どうして君は僕の側にいてくれたんだ？」

少女は眠った見ず知らずの自分の側に、こんな遅くまでいてくれた。

無論、普通はそんなことは無いはずだと直哉は思う。

「さっきも言っただけど、みっともなく泣いている男の子をほっといたら可哀相でしょ？」

泣いている所を見られたことを思いだし、また赤面しながらも納得のいかない直哉は少女に問い返す。

「でもそれなら誰かを呼ぶなりして、君は残る必要は無いはずだろ。それにさつき君は僕を『支えてあげる』と言った。見ず知らずの僕になんでそんなことを言ったのか、それが知りたい」

確かに少女は口にした、直哉に対して『支えてあげるから』と…。

言われた時は嬉しく思ったが、冷静に考えてみるとおかしい。

直哉は少女の目を真っ直ぐに見つめる。

少女はしばらく黙り込み、なにかを思うようなそぶりをした後、口を開いた。

「私は……私は貴方のためにこの学校に来た、貴方を支えてあげるために来たの。」

そういった少女は、真剣な眼差しで直哉を見つめてくる。

そんな真剣な少女に直哉は一瞬見とれた。

そして少女のいった言葉の意味を考え戸惑う。

「えっ……それってどういう……」

そんな直哉を見て、とても悲しそうな顔を見ると少女は立ち上がり、

「ごめんなさい、これ以上のことはまだ話せないの……。」
そういうとその場を立ち去ろうとする。

去り行く少女の後ろ姿を見ると、直哉にとっても大きな寂しさが襲い掛かってきた。

独りになるのは嫌だという恐怖が生まれる。

少女がいなくなるにつれて、自分が自分でなくなっていく。

つらい、もう独りでは歩けない……側にいてほしい。

その気持ちに気付き、驚きつつも直哉は思う。

『彼女なら僕を支えてくれる……』

なんの根拠もない、今日話したばかりの彼女になぜそう思ったのかさえ分からない。

ただあの時の支えてくれるという言葉に、自分は一瞬でも安堵した。

たったそれだけでも直哉は確信を持てる、自分は彼女に側にいてほしいんだと。

今になって気づく、自分は彼女に一目惚れをしたのだと。

だから直哉は覚悟を決めた。

「待って!!」

去り行く少女に直哉は声をかける。

「えっ？」

突然呼び止められ、驚いたという様子で少女は振り向いた。

直哉は自分でもなぜこんなにも積極的なのかと驚くが、なぜか自然に言葉はでていた。

少女の目を真っ直ぐに見つめ、ハッキリと伝える。

「僕と……僕と付き合ってください。」

突然の告白に少女は驚いている。

しかし直哉は揺るがずにしっかりと思いを伝える。

「僕は…貴方に側にいてほしい。」

すでに日は暮れて、月明かりが二人を照らしていた。

側にいてほしい（後書き）

なんというぐだくだ感… あー！！自分にイライラする！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8787r/>

君となら歩いていける

2011年10月8日22時07分発行